
「日記帳が擬人化した」

巡芳もとめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「日記帳が擬人化した」

【Nコード】

N6592Y

【作者名】

巡芳もとめ

【あらすじ】

日記帳が擬人化した。

日記帳が擬人化した。

なまぬるい妄想ばかりしてる私の日記帳をそのまま投影した、まぬけ顔の高校生の女がでてきた。ちゃんとうちの学校の制服まで着ている。

アニメみたいに目が「33」の形になっている。

「ついてくるなよ！」

朝の登校時間、私は何度も日記帳の奴を怒鳴りつけ早足で逃げるのだが、息切れひとつせず、表情ひとつ変えず奴は私を追いかけてくる。無言で、タタタタッと。

ついに教室まで奴はついてきてしまった。

そして、教室に入った途端、

「十月十日。今日も後藤くんはかつこいい。こうして後ろの席から彼を見ている時間が最も幸せなひとときだ。あのぼんやりとした目が可愛すぎて、母性をくすぐられる……」

突然、日記帳の奴が無表情で、日記の中身を早口な棒読みで喋り出した。

「ギャーーーー！！！！」

私は自分の鼓膜をもつんざくような叫び声を上げ、日記帳の奴の腕を掴み、ダッシュで廊下に走った。

「何べらべら喋ってんじゃー！！？」

日記帳の奴は私に頭をたたかれると無言になった。

「あ、あ、あんたねえっ！！」

わなわなと手が震える。教室に戻れないじゃん。

おもいきり、後藤くんにも聞かれてたし！

「どうしよう?!」

「十一月十七日。明日こそは後藤くんに気持ちを打ち明けてしまお

うか……」

日記帳は、ついきのうの日記を読み上げた。

「ふつ。できるわけないじゃん告白なんて。ていうか、あんたのせいで余計にしづらくなっただしね」

私は怒る氣力を失い、壁にもたれかかった。

その時、

教室から後藤くんが出てきた。

身構え体を硬直させる私。彼はこっちに向かってくる。

「一色。その子、誰なの？」
いっしき

後藤くんはいつものぼんやりな目で、ぼんやりとした口調で私に言った。

「ええと……知り合い、みたいな？」

心臓ばくばく。さっきのことについて何て言われるだろうか。もうおしまいだ。

「ふーん。なんか、俺がどうか言ってたけど」

あ、そうか。後藤くんからしてみれば、さっきのは私の言葉じゃなくて、この日記帳の奴の発言だと思ってるわけだから平気か。

「き、氣のせいじゃない？」

私が、あはと適当に笑ってみせると、日記帳の奴が、空氣を読んだのか、てくてくと向こうへ歩いて行ってしまった。

「……あのさ」

後藤くんが急に真剣な顔をする。怒られるのかと内心はらはらする私。

「勘違いだったらごめんね。でももし、おまえがあの子の、その、恋の応援みたいのしてんだしたら、言っておかないと思うて……」
意味不明なことを言われ、頭の中の整理がつかない。

クエスチョンマークがたくさん頭に咲いた私の反応に彼も自分で混乱している様子だったが、

「だから、そのつまり、俺は、一色のことが好きだってことです」

と、ますます混乱することを言った。

「好き？」

「うん、そう」

しばしの沈黙のあと、日記帳の奴が戻ってきた。

「四月十日。校庭の桜がキレイ。桜を眺めていると、見知らぬ男の子が隣にやってきて笑った。後藤くんという子だった」

何ヶ月も前、私が後藤くんと初めて会ったときの日記を棒読みで読み上げた日記帳。

「あれ、それって俺が一色と初めて喋った日の話じゃない？ 懐かしいな」

私は驚く。彼もその日のことを覚えているなんて。

「よく覚えてたね」

おそろおそろ私は彼の目を見て聞いた。

「うん覚えてるよ。て言っても、俺はそのずっと前からおまえのこととは知ってたけど。ていうか、ずっと前から見てたけど」

ぼんやりとした目が優しい笑顔になった。

やっと私の中で、彼が言おうとしていることが理解できた。私も笑う。

気がつくと、日記帳の奴がいなくなっていた。

放課後、下駄箱でやっと発見した日記帳の奴は、動かなくなっていた。人形みたいに。

そのとき初めて目に付いた、彼女の背中のもの。

「ゼンマイ仕掛けだったのか」

そのゼンマイをくるくるまわしてみたが、もう動かなかった。時間切れか。

そして彼女は泡のように消えて、私の両手の上に、元の「日記帳」として乗った。

「おい、一色。なにやってんの？」

後ろから声をかけられ振り向く。「一緒に帰ろ」と後藤くん。頷

く私。

「それ何？　もしかして日記帳？」

私の手に握られた一冊の分厚い本を見て彼が笑う。見せて見せてと手を伸ばす彼から必死に日記帳を死守する私。

後藤くんと初めて手をつないで下校する帰り道。

心の中で「日記帳、ありがとね」と呟く。

今日書く日記は、今までで一番ハッピーな内容になるだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6592y/>

「日記帳が擬人化した」

2011年11月20日12時51分発行